

# ナンセンス絵本の魅力とセラピー効果についての研究

笹 倉 剛

## Study on charms of nonsense picture books on its therapy effect

Tsuyoshi SASAKURA

### 要 旨

最近、日本でも注目を浴びているナンセンス絵本についての研究を深めていきたい。なかでも歴史的に大きな影響を与えてきたエドワード・リアやハインリヒ・ホフマンの作品を研究することで、ナンセンス絵本の意義や魅力を探っていく。さらにナンセンス絵本が絵本セラピーとしてどのような効果や影響があるのかを実践をもとに述べていきたい。

**キーワード：**ナンセンス絵本、ビブリオセラピー（読書療法）、絵本セラピー、エドワード・リア、ハインリヒ・ホフマン

### はじめに

最近、ナンセンス絵本が日本でも注目され始めている。そのナンセンス絵本とはどのような絵本のことを指すのか、定義は曖昧で明確でない。本研究では歴史的にナンセンス絵本の誕生から現代までのナンセンス絵本の推移を探りながら、ナンセンス絵本について述べていきたい。特に、エドワード・リアの絵本がナンセンス絵本として知られているが、それはどのような絵本であったのか、リアの著作をもとにナンセンス絵本の分析をしていきたい。また、ドイツ

のハイリヒ・ホフマンの『もじゃもじゃペーター』の絵本についても触れたい。そのようなナンセンス絵本がビブリオセラピー（読書療法）または絵本セラピーとしてどのような効果があるのか、いくつかの実証的な研究をもとに考察していきたい。

なぜ、ナンセンス絵本が注目され始めたのか、そのナンセンス絵本に秘められたユーモアや奇想天外なアイデアを、作品を通して紹介していきたい。日本ではユーモア的な絵本がすべてナンセンス絵本と呼ばれている現状がある。本来、ナンセンス絵本とは何かを考えながら、改めてナンセンス絵本の本質を探っていきたい。

エドワード・リアが表現したかったナンセンス絵本の本質とは何か、また伝えたかったメッセージとは何か、などを考えることによって、ナンセンス絵本が人々に伝えたかったものが明確になってくると思われる。

## 1 ナンセンス絵本について

### (1) ナンセンス絵本とは

『リアの ナンセンスの絵本』（ほるぷ出版）によると、『ナンセンスの絵本』はエドワード・リアが1846年に、本文も挿絵も2巻本で刊行され、それから1899年の27版まで刊行され続けたと記されている。このエドワード・リアの本書が、ナンセンス絵本の口火となったことは事実である。この当時としては、本書が27版まで出版されたことを考えると、評価もかなり高かったことが推察できる。

そもそもナンセンス絵本の源流は、ナンセンス文学にあり、そのナンセンス文学の古典はイギリスに集中している。マザー・グースの童謡集もそうだが、エドワード・リアはその『ナンセンスの絵本』を初めとする著作で発表された多数のリメリック（五行俗謡）の詩によって、上記の二つの流れを合わせた近代的なナンセンス文学の大衆化を促進したと言われている。

このような流れを引き継いだのがルイス・キャロルであり、彼の児童文学作品『不思議の国のアリス』（1865年）、『鏡の国のアリス』（1871年）はナンセン

ス文学を世界的に広めたとと言える。このような点で、エドワード・リアのナンセンス絵本は、ナンセンス文学にも大きな影響を与えていることがわかる。

まず「ナンセンス」(Non-sense) ということばはどのような意味があるのか。一般的には「センス」(Sense, 知覚、意味、分別など) の否定形であり、言葉の上での「ナンセンス」は「意味のないもの」「馬鹿げたもの」を指しているが、ナンセンス文学がクリエイティブ(創造的)であるためには知性的な厳密と方法とを必要とするのである。読者から「意味のないもの」「馬鹿げたもの」と思われていても、文学としてナンセンスの世界では論理の法則が無視され、せいぜい我々の理解を超えた、なにか不可解なものが存在するのだということがほのめかされるに留まるのである。ここがファンタジーとは異なっているところである。つまり、ファンタジー作品においては、魔術はある不思議な現象を、それが作品の中でなぜ起こるのかを論理的に説明できるものとして採用されているのである。このようにファンタジーの世界では、論理的にも計算されつくした面が強いが、ナンセンス文学(絵本)には不可解で論理的な法則もなく、ただ不思議な世界が描かれているという次元のものが多い。しかし、どちらも読者を驚かせるような不可思議なユーモアを扱っていることに変わりはない。

「ナンセンス絵本」が人に感銘を与えるのは、人間が常に何に対しても、場合によってはそれが存在しないところにまで意味を求める生き物であるからと言われている。つまり、読書が物語の中で想像の翼を広げ、何の矛盾もなくその世界にはまり込んでいくからである。作家は読者を自然にそのような世界へと導く術を心得ている。また、矛盾なく自然にはまり込むような絵本や文学こそ、すばらしい作家であり画家であるといえる。

「ナンセンス」の多くは本質的にはユーモアに属するが、それは「意味を成す」ことによって面白みが引き出される大多数のユーモアとは反対に、「意味を成さないこと」によって成立するユーモアである。この「意味を成さないこと」のユーモアが無条件に人に喜びや笑いを誘うのである。

リア自身も『EDWARD LEA'S NONSENSE OMNIBUS』(邦題：りあさんて、どんな人?) みすず書房、のあとがきに次のように述べている。(P.252)

「このささやかな本を世間に送るにあたって、前篇が広く読まれ、各方面からも行為のある好評をいただいたことに、感謝の意を表したい。かくも多数の読者に無邪気な笑いを与えることができたのは、じゅうぶん満足に値するし、また深く感謝する次第である。」

## (2) ナンセンス絵本（文学）とファンタジー文学の違い

ナンセンス文学（絵本）とファンタジー文学の違いがどこにあるのかがよく議論されることがある。ほとんど似ているようであるが、実は明らかに違った面もある。その違いを明確にすることで、ナンセンス文学（絵本）がより鮮明になってくると思われる。

次にナンセンス文学（絵本）とファンタジー文学との違いをまとめてみると、次のようなことが言える。特にファンタジー文学については、『子どもの本の歴史』（柏書房）の p.177 から p.188 に詳しく述べられている。

	ナンセンス文学（絵本）	ファンタジー文学
文学としての性格	常識的な約束事や論理性を無視	一貫性と統一性が存在し論理的に説明される
ユーモア	意味を成さないユーモア	ユーモアよりも超自然的な、幻想的、空想的な事象を用いることが多い
特徴	間違っただ論理的帰結、不正確さ、文章と絵との間の矛盾、不可解な独断、トートロジー（同義語反復）など	奇妙な生物、不思議な世界観、魔法などが出てきてもすべて論理的に説明できる
役割	ナンセンスな表現が作品の中で役割を演じてはならない	論理的に筋が通っていれば役割を取得できる
登場する生き物等	パロディや風刺、言葉遊びなどの表現が多い	不思議な世界観、魔法・魔術、人語をしゃべる動物など
代表的な作品	『ナンセンス絵本』、マザーグースの動揺集、『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』など	『ナルニア国ものがたり』『ホビットの冒険』『指輪物語』『ゲド戦記』『モモ』など

このように違いを挙げていくと、ナンセンス文学（絵本）とファンタジー文学（絵本）の違いが明らかになってくる。ファンタジー文学（絵本）が超自然的な要素を含む架空の世界や魔法・魔術などを扱っていることが多いのに対して、ナンセンス文学（絵本）はまったく意味を成さないことによるユーモアが描かれていることに大きな違いがある。また、内容的に見ても論理的に筋道が通っているファンタジーに対して、ナンセンスは論理性や約束事は一切無視していることも大きな違いと言える。

## 2 エドワード・リアのナンセンス絵本とは

### (1) エドワード・リアについて

ナンセンス絵本を語る上で、エドワード・リアの著作は限りなく大きいものがある。またナンセンス絵本の創始者としても顕著な業績を残している。

最初にエドワード・リアについての人物像を『ナンセンスの絵本』（ちくま文庫）の訳者あとがき、及び『ナンセンスの絵本』（ほるぶクラシック絵本）の奥付より述べたい。

エドワード・リアはロンドンの北にあるホロウェイという街に生まれ、23人の兄弟姉妹の20番目の子どもである。すべての子どもが同じお母さんとお母さんから生まれているから、驚くべき事実である。父親は株の仲買人であったが、エドワードの幼少の頃、父親が詐欺で投獄され、一家が離散したために、21歳年上の長姉に育てられる。

エドワードは15歳で商業画家としてスタートし、19歳でロンドン動物園の画家となった。それがきっかけでダービー伯爵に見込まれて、ノーズリー・ホールに4年間住み、『ノーズリー動物園』という挿画を描いた。そのころ友人からリメリック（五行俗謡）の挿絵本を見せられたのがきっかけで、コント風の5行の童謡を作ることを思い付き、『ナンセンスの絵本』の詩と絵本の大部分の絵を描いて、ダービー伯爵の孫たちを大喜びさせたと記述されている。

エドワードは、また旅行家として、風景画家としても有名であった。『挿画入りイタリア紀行』などを著し、ヴィクトリア女王の絵本の先生も務めたこと

があると記録されている。彼は、徹底した人間嫌いで、癲癇（てんかん）と喘息（ぜんそく）という持病があり、内向的で人並みはずれた大鼻をしていることもコンプレックスとしながら、一生独身のまま、サン・レモで生涯を閉じた。最後は寂しい人生だったようである。

彼の母が出産に疲れ、病気がちなエドワードの面倒も見なかったために、不幸な子ども時代を過ごしたようである。健康的で愛情あふれる家庭に育たなかったせいか、終生、彼は理想の子ども時代にあこがれ続け、常識的な行動を解さない子どもに自己を投影し、子どものためにナンセンスな詩を創り、大人の世界はくだらないと作品を通して主張してきた。このような面は、彼が社会の既存秩序への反発のエネルギーが秘められていると見てよいだろう。

このように彼の育った環境や生い立ちなどを振り返ることにより、エドワード・リアの人間性や作品の背景を知ることができる。またエドワード・リアには持病があり、徹底した人間嫌いであったように、ファンタジー文学で知られるルイス・キャロルも吃音や肺病などの持病があり、エドワードと同じようにかなり個性的な性格であったことが知られている。

## （2）『ナンセンスの絵本』について

では、エドワードの『ナンセンスの絵本』について、彼がどのように作品の中で表現しているのかを見ていくことで、ナンセンス絵本の持っている特長や形式などを理解する手助けになると考えられる。

まず、エドワードの『ナンセンスの絵本』は日本ではいくつかの出版社から出されている。しかし、いずれも現在は絶版になっており、いろいろな図書館の所蔵を調べて取り寄せるしかないのが現状である。

ここでは『ナンセンスの絵本』のちくま文庫、岩波書店、ほるぷ出版（ほるぷクラシック絵本）の3冊を取り上げる。いずれも訳者は柳瀬尚紀氏である。どの本も取り上げている作品は少しずつ異なっている。ちくま文庫とほるぷ出版はカラー印刷であるのに対して、岩波文庫はカラーになっていない。ただ、岩波文庫はそのページに絵とリメリック（五行俗謡）の詩が掲載されているの

に対して、他の2冊はその原文の詩は巻末に紹介されている。それぞれ出版社の特徴が出ていて興味を感じられるものである。

岩波文庫は白黒ではあるが、絵を見ながら詩を同じページで見ることができるから、絵の特徴もつかみやすい。一方、他の2冊は絵に主眼が置かれていて、カラーであるから、それだけに絵本的な性格が色濃いものになっている。3冊ともに、絵の下に柳瀬氏の翻訳がついている。彼の訳ですばらしいのは、原詩と同じく訳詩で韻を踏むようにしているところである。

この本はエドワードによるリメリック集で、つまりリメリック (limerick) とは、a-a-b-b-a と韻を踏む5行の戯れ歌をさす。これはこの詩形は英詩にしかみられないと言われている。アイルランドに同名の土地（現在の州、州都）があるが、発祥も名称の由来も定かにはなっていない。

次に『ナンセンスの絵本』から数点を取り上げて考察することにする。もっとも代表的なリメリックとして、最初のページに挙げられているものを紹介したい。※『ナンセンスの絵本』（岩波文庫、p. 6）、（ちくま文庫、p. 6）、（ほるぷ出版、p. 3）

この絵を見るだけでも、たいていの人は笑い転げるだろう。まずひげが人並みはずれて大きいから、フクロウ、メンドリ、ヒバリ、スズメが鳥の巣と勘違いして引っ越してきている。この絵の男性の表情も実に愉快で、両手を後ろにまっすぐ上げて、両足もそろえて突っ立ったままで、椅子から乗り出した格好が滑稽に思える。



『ナンセンスの絵本』 岩波文庫、p. 6

この絵に、やはりこの男のせりふがあり、それを読むことによってその笑いはよりいっそう助長される。この男はこんなにも長いひげをしていたら、鳥の巣と勘違いされると思っていたところに、鳥がやってきたから余計にユーモアを誘うのである。

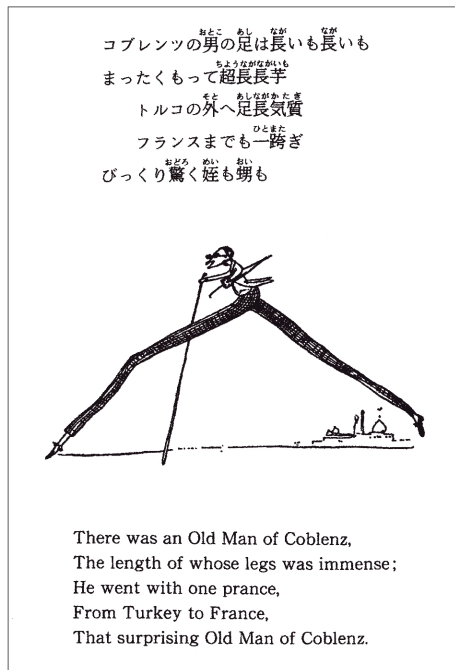
おそらく、エドワードは絵だけを見ても面白い工夫をしているが、それをリメリックの韻を踏む詩を同時に読むことで、面白さを誇張しているように思える。男性の目や鼻などもユニークで、飽きさせない絵となっている。それだけ隅々まで絵をじっくり見せるだけの絵の才能があることが理解できる。

次は、とても足の長い男が歩いている絵である。※『ナンセンスの絵本』（岩波文庫、p.74）、（ちくま文庫、p.54）、（ほるぷ出版、p.15）

この絵に出てくる脚の長い男は、コブレンツ出身で、注釈にはコブレンツとはドイツの西部の都市で、ライン川とモーゼル川の合流点となっている。このように地名を出すことで、読者は本当にこのような男がいるような錯覚に陥るので面白いと思われる。エドワードが合流している川のコブレンツの地を意識して、このような絵を描いたのであれば、この発想はすごいと考えられる。

この詩の中で、足の長さがけた違いで、トルコとフランスを一跨ぎ、という部分でみんなをあっと驚かすと言っていますが、その通りだと思います。またそのスティックも長いこと長いこと。

世の中にはこのような足の長い



Coblenz (K-) ドイツ西部の都市、ライン川とモーゼル川の合流点。

『ナンセンスの絵本』岩波文庫、p.74



男がいないということはわかっている。でも、もし、そういう男がいたとしたら、国をひと跨ぎできるかもしれない。あまりにも超自然的な絵が、見た瞬間に読者を驚かせ笑いの渦にする。これがナンセンス絵本の魅力かもしれない。

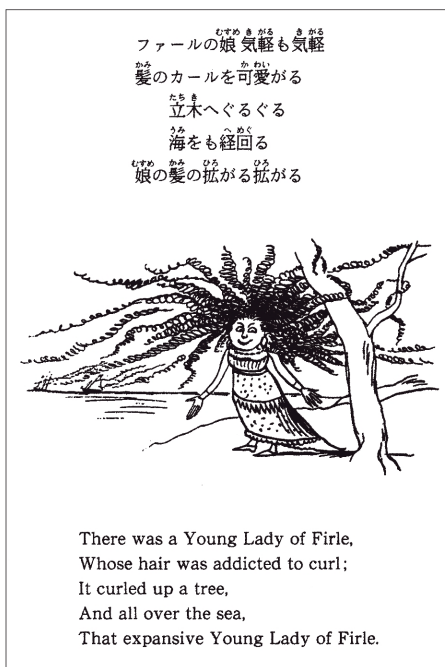
次に紹介するのは、髪の毛がどこまでも伸びる女性の話である。(※『ナンセンスの絵本』(岩波文庫 p.152)

この絵では、少女の髪が近くの木や遠くの海の上の船までも伸びていくほど髪が広がっている。髪の毛も、えんどうのツルを思わせるようにカールになっていて、何にでも巻きつくようになっている。娘の名前が Firlle で、巻きつくのが curl、木が tree で、海が sea のように、a-a-b-b-a のような韻を踏んでいることがわかる。

このように『ナンセンスの絵本』から何点か選んで分析すると、共通して感じられる要素を含んでいる。現実の生活では起こりえない超自然的な人間の姿を描いている。そこには虚構の世界ではあるが、何かしらユーモアと笑いが潜んでいる。時にはエドワードは言葉遊び、パロディ、社会的な風刺など、これらも「意味を成さない」ユーモアであると解される。このようなユーモアに子ども達はすぐに引き込まれていくのである。

最初に述べたように、エドワードはリメリックの5行詩があってそれに絵を添えることで、よりユーモアが感じられるように配慮していることと、詩そのものリズムがあり、読みやすい詩になっていることが理解できる。

エドワード自身、このような絵本から得た収入のほとんどを貧しい人々に分



Firlle サセックス東部、名は「オーク樹の茂る地」の意。

『ナンセンスの絵本』岩波文庫、p.152

け与えたという記述が残っていることもエドワードの人間性を物語っている。

では、エドワードの他の作品についてもナンセンス絵本の特徴をつかんでいることをみてみよう。

### (3) ノンセンス・ソング

このノンセンス・ソングは、挿絵より詩を中心としたものに仕上がっている。ここでは登場する生き物を擬人化させ、会話したり、歌を歌ったりさせている。そして詩の最後にはかならず同じフレームになるようにしている。これはソングだから、そういう形式をとっているように思える。でも詩としては、とても美しく、メルヘンチックに描かれているのが印象的で、『ナンセンスの絵本』のように、超自然的な登場人物や生き物は登場していない。とても美しい詩に仕上がっているといえるのではないだろうか。

「ふくろうと小猫」では次のような詩になっている。



ふくろうと小猫

I

ふくろうと小猫が沖にでた  
きれいなきみどりのボート乗り  
五ポンド紙幣でよく包み  
たくさんお金とみつのせて  
ふくろうはそらの星みあげ  
かわいいギターで歌い出す

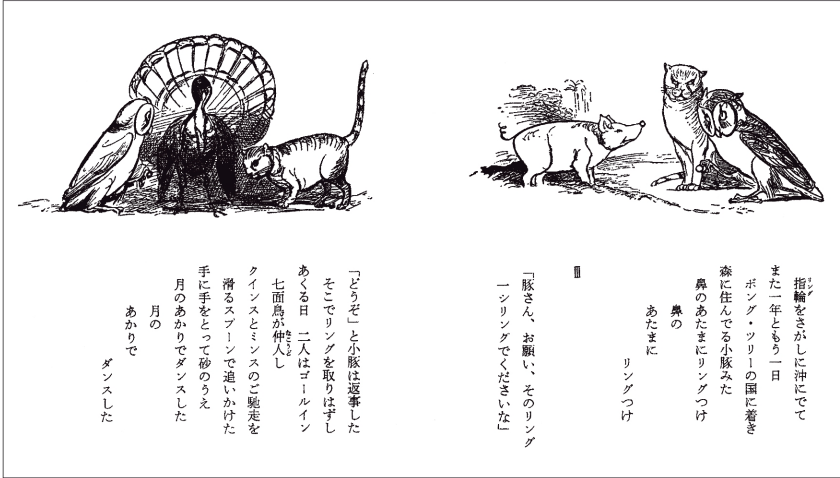
「かわいいわたしの小猫ちゃん  
なんてきれいな猫かしら  
なんて

きれいな

猫かしら」

II

小猫はふくろうにいいました  
なんて素敵な鳥でしょう  
うっとりするようなうまい歌  
さんざん待った私たち  
これから一緒に暮らしましょう



この詩はノンセンス・ソングとあるように、全体の形式が、行数、繰り返しのフレームなど、やはり詩でありながら動揺（わらべ歌）を意識して作られたものであることが理解できる。マザー・グースも意識していたのかもしれない。恐らく、エドワードはこのノンセンス・ソングを子どもたちが歌を歌いながら遊んだり喜んだりできるように作詞したものであることが想像できる。

この『ノンセンス・ソング』（思潮社）の巻末でエドワードは、前述した『ナンセンスの絵本』は「知人や有名人に対する風刺の意図は全くない」と述べている。イギリス文学の特徴がユーモアであるように、エドワードの作品はユーモアというより、「かいぎゃく」「笑い」の精神を含んでいるとも評されている。しかもパロディの精神も盛り込んでいるとされている。エドワードのリメリック（5行俗謡）は、いかに5行の中に韻を踏みながら、ユーモアや笑いを盛り込むかが最大の焦点であった。そういう意味で、このノンセンス・ソングの詩をよむと理解できると思われる。

（4）カングル・ワングルのぼうし

この絵本は、1969年にヘレン・オクセンバリーの絵によって作成されたものであるが、日本ではほるぷ出版から1975年に出版されている。ほとんどが絵か

ら構成される絵本で、文章はきわめて少ない。絵はエドワード自身ではないので、詩を中心にお話の全体を示すと次のようである。

ホットケーキに そっくりの  
おいしいお菓子の はをつけた  
クランペティの 木のうえに  
カングル・ワングルが すわってた。

けがわのぼうしに かくれてて  
かおは、だれにも 見えやしない  
やたら でっかい ぼうしには  
リボンや レース すず つけて  
これじゃ とっても 見えやしない  
カングル・ワングルの かおなんて・・・・・・・・。

クランペティの 木のうえで  
カングル・ワングルは、 ひとりごと。  
「ぼくがいちばん すきなのは  
ジャムに ゼリーに パンなのさ！

だけど この木に すんでみて  
はっきり ぼくは、しまったのさ。  
ここへは だれも きてくれない。  
こんなくらしは、つまらない」

クランペティの木を みつけ  
カナリアたちが やってきて  
「こんなすてきな ばしょなんて  
いままで いちども 見たことない！

あなたのきれいな おぼうしに  
わたしたちの すを つくらせて。  
すてきなあなたに ぴったりの  
わたしたちの すを つくらせて。  
おねがい、カングル・ワングルさん！」

クランペティの 木のほうへ  
コウノトリやら あひるやら  
フクロウに ハチに カタツムリ。

かえるのあとから ふらふらと  
コルクぬきみたい な 足をした  
フラフラドリまで やってきた。  
「あなたのきれいな おぼうしに  
スイートホームを つくらせて。  
おねがい カングル・ワングルさん！」

それから 金ぴかライチョウや  
足ゆびのない ポプルやら  
ギリシャ生まれの こぐまやら  
きらきらおはなの ドングやら

フルートをふく 青ひひや  
トルコからきた こうしやら  
はったりねずみや びっくりこうもり

カングル・ワングルの ぼうし見て  
みんなで くらそうと やってきた。

クランペティの 木のうえで  
カングル・ワングルは、 ひとりごと。  
「みんなそろって おどったら  
どんなに たのしいことだろう！」

むらさきいろした 月のよる  
青ひひのふく フルーツで  
ゆかいなおどりが つづきます  
みどりの まあるい はのうで・・・・・・・・。

カングル・ワングルも いっしょに ね。

この絵本は内容を読むと大体わかると思うが、エドワードがナンセンス絵本の最初に書いていた文（『ナンセンスの絵本』岩波文庫、p.6）について、それをお話風に広めたような感じもする。少しメルヘンチックな面もあるが、やはりカングル・ワングルが何者であるか。帽子が大きすぎて、本人はまったく見えない。ただ見えるのは腰から下か、胸から下の部分だけである。

この作品からもエドワードのナンセンス絵本の特徴が垣間見える。ナンセンス絵本としてこの絵本の特徴をまとめると次のようなことが言える。

① 普段の生活にはないようなものが登場。超自然的な存在が中心となる。

カングル・ワングルが毛皮のものすごく大きな帽子の中にいる。顔もわからない。このような不思議な設定に子どもを引き込む魅力がある。

② 次々に楽しい展開が待っている

カングル・ワングルの毛皮の帽子に、カナリヤ、コウノトリ、フクロウなどの鳥が次々に巣を作りやってくる。

③ ありえないような生き物などを登場させる

きんぴかのライチョウ、足の指のないポブル（ナンセンス・ソングに登場する足指のない生き物）、はったりねずみなど。これは、よりお話を盛り上げるための誇張表現である。

④ 最後には、子どもたちを愉しませて終結に導いている

みんなでおどったり、フルートを吹いたりして楽しい情景を醸し出している。

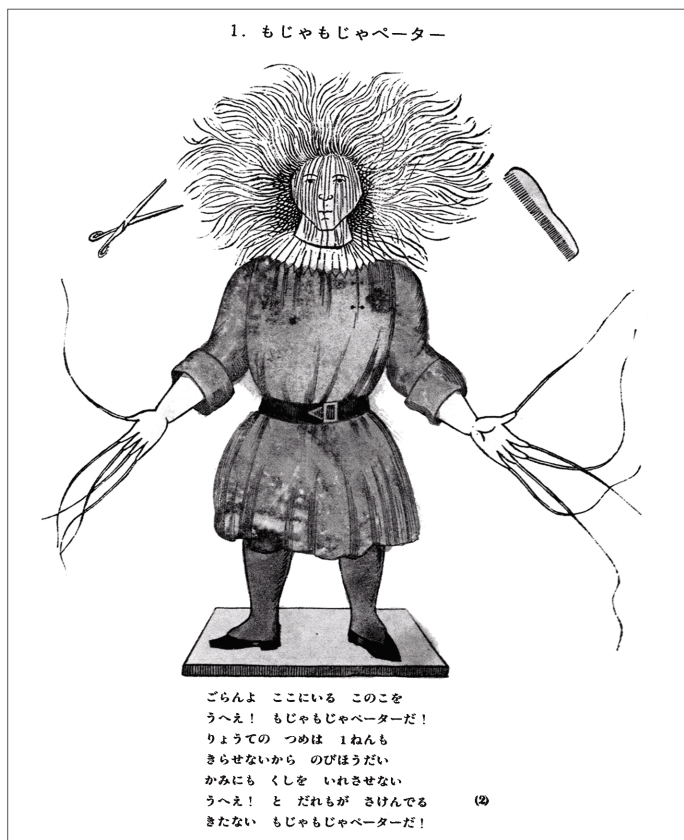
⑤ 全体としてほのぼのとしたユーモアが感じられるように設定している

### 3 『もじゃもじゃペーター』の絵本

エドワード・リアの絵を見ていると、ドイツで出版された『もじゃもじゃペーター』を思い出させるような印象を受ける。この本はハインリッヒ・ホフマンによって、1845年に出版され、実に160年以上も世界の子ども達に読まれてきた。『ナンセンスの絵本』が1861年に出版されていることから、『もじゃもじゃペーター』の絵本はそれ以上も前に出版されたことがわかる。だから、実はナンセンス絵本の最初は、この『もじゃもじゃペーター』（ほるぶ出版）が始ま

りではないかという方もいる。この本の作家のホフマンは精神科医であり、3歳半の子どものために描いた絵本とされている。しかも、自分で描いた詩や絵を石版に描き写す石版工や手で彩色する人たちを厳しく監督しながらこの本を完成させたとある。ホフマンは精神科医だけあって、児童の心理をよくとらえていて、子どもたちが「怖い、怖い！」と言いながら何度も読みたがった絵本としても有名である。しかも世界中で翻訳された人気絵本でもあった。

この絵本には10篇の物語が入っているが、『ナンセンスの絵本』とは異なるのが、最初の「もじゃもじゃペーター」以外は何枚かの絵と挿絵があるところである。次は最初のページの「もじゃもじゃペーター」である。



このような絵本の文を読んだら、ホフマンがこの絵本を通して子どもたちにしつけをさせるような「しつけ絵本」としての性格も持っていることが理解できる。また、この本は佐々木田鶴子さんが翻訳しているが、やはり日本語に翻訳した文も韻をふんでいるところがすばらしい点と思われる。この絵本の詩はリズムがあり躍動感がある。

その名前がもじゃもじゃペーターというだけあって、つめは1年も切らないから髪のように伸びている。頭の毛は櫛でとかないから、ぼうぼうの伸び放題。このページが最初にあるだけで、なんと奇妙で変わったお話だと、子どもたちを惹き付けるのである。そして次に「わるぼうずフリードリッヒのおはなし」(p. 3 - p. 5) が掲載されている。

## 2 わるぼうずフリードリッヒのおはなし

フリードリッヒ、フリードリッヒ  
ほんとに こまった わるぼうず！  
ハエを つかまえては はねを むしり  
いすは ぶっこわすし とりは ぶっころす  
ネコだって ひどいめに あわされた  
そのうえ なにを したとおもう？  
むちで グレートヒェンを たたいたんだ！

おおきいイヌが みずのみばで  
みずを ぴちゃぴちゃ のんでいた  
そこへ こっそり フリードリッヒ  
むちを かたてに のびよる  
むちを ふるえば イヌは ほえたてる  
それでも かまわず さらにぶつ  
とうとう イヌは フリードリッヒの  
あしに がぶりと かみついた  
あばれんぼうの フリードリッヒも  
おおごえで ワアワア なきだした



フリードリッヒは ベッドのなか  
あしが いたくて たまらない  
そのうえ みにきた おいしゃさんに  
にがあい くすりを のまされた

フリードリッヒの テーブルでは  
イヌが すわって ケーキやら  
レバー・ソーセージやらを ばくついて  
そのうえ ワインまで のんでいる

ホフマンはこの本を3歳半の息子のために書いたということだが、それにしても笑いのユーモアの質といい、起承転結をしっかり踏まえたお話の構成には驚くべきものがある。前半は子ども自身も持っている残虐性というものを描いている。子どもは時として残酷な行動でも平気で行うことがある。ここでは紹介していないが、絵本の絵が今までの絵本にはない構図で、上から下へ流れるように時系列で、お話に出てくる場面が描かれている。しかもどのページも単調でなく変化があり、絵本の基本である絵の部分と文がはっきりと見やすく配列されていて見事としか言いようのない出来栄である。この絵本のどこがナンセンス絵本の要素があるのか。それは、結末の5ページにあるように、フリードリッヒの行いの顛末があまりにも劇的で、死にそうに寝ている姿と、おいしそうに食べているイヌの対比の絵がそれを示している。本来、イヌはテーブルで食事しないし、人間のようにきちんと座って、皿のケーキやソーセージを食べている絵はナンセンスそのものである。このユーモアをお話の落ちとして採用しているところも、ホフマンの物語の構成上からも素晴らしい点である。

ホフマンはこの絵本のほかにも3冊の絵本や詩集も出している。

ホフマンがエドワードと違うのは、前述した①の超自然的な登場者ではないところが違う。それ以外の②～⑤までは同じような要素を含んでいるといえる。

#### 4 ナンセンス絵本の特徴

ここまでエドワード・リアの作品を中心にナンセンス絵本について述べてきた。またハインリッヒ・ホフマンの『もじゃもじゃペーター』もエドワードと同じように日本のナンセンス絵本に大きな影響を与えてきた。日本の絵本については後述するが、ここでナンセンス絵本の特徴について述べてみたい。

ナンセンス絵本は確かにユーモアを扱い、子どもたちの笑いを誘うのはあくまでも上質な笑いであって、単なるその場限りの面白さでないことがわかる。それはエドワードが19世紀のイギリスの最大の詩人と言われたテニソンと深い親交があり、彼のことを絶賛していたことが『ノンセンス・ソング』の解説にも紹介されている。だから、エドワードはリメリック（5行俗謡）の中に、詩人として厳密な押韻形式を大切にしながら、最大の笑いやユーモアをどのように盛り込むかが最大の関心ごとであった。『ノンセンス・ソング』の解説でも述べているように、「エドワードのリメリックは他人の追従を許さない逸品であった」と記されている。このような点でエドワードが「蔭の桂冠詩人」と言われている所以であろう。

このことはホフマンの『もじゃもじゃペーター』においても、子どもを対象とした笑いやユーモアを盛り込み、お話の構成としても起承転結を踏まえた仕上がりになっている。しかも、その笑いやユーモアは単なる面白さを表現するだけでなく、読み終わった後も余韻を残すような結末を演出している。ナンセンス絵本のもっとも難しいところであると考えられるが、最終的にはやはり文学的な価値や評価がどれほど認められるかで、その作品が後世に読み継がれていくかで立証される。こういう意味では、エドワードもホフマンも現代まで読み継がれている事実から、その偉大さが理解できる。もちろん、残念ながら絶版になった本もあり、読者の目に触れにくい状況も出てきているが、改めてエドワードやホフマンが遺してくれたナンセンス絵本の原点に戻ることで日本におけるナンセンス絵本を見る目を養うことに繋がっていくと考えられる。

いずれにしろエドワード・リアや児童文学のルイス・キャロルが描き出した奇想天外で破天荒なユーモアや笑いが付けた先鞭は、後の児童文学に大きな影響

を与えたことを『子どもの本の歴史』（柏書房）の p.213以降で述べている。

## 5 日本におけるナンセンス絵本

日本でもナンセンス絵本が注目されるようになり、理屈なしに面白くおかしい絵本が、子どもたちをいつの間にか夢中にさせている。そのナンセンス絵本として有名な長新太と佐々木マキを取りあげてみよう。

### （1）長新太の絵本

日本ではナンセンス絵本の代表としてあげられるのが長新太である。

長新太の作品の『キャベツくん』（文研出版）を例に解説することにしよう。

この作品は、ブタヤマさんという主人公が、お腹がすいているのでキャベツを食べると、キャベツくんが「ぼくをたべるとキャベツになるよ！」と言ったとおり、キャベツになってブタヤマさんが空に浮かぶ。続いて、「じゃあ、ヘビがきみをたべたら、どうなるんだ？」と聞くと、ブタヤマさんはお団子みたいなキャベツのヘビが空に浮かんだ。このように、いろいろな動物が次から次へとキャベツを食べると、その動物とキャベツが合体した生き物になり、空に浮かぶのである。この奇想天外な発想は、なかなか大人には受け入れがたい発想であるが、どういうわけか幼い子どもが読むと腹を抱えて笑うのである。このようにお話を読んでも大人と子どもの受け取り方に大きな違いがある。それだけ子どもの発想は柔軟で想像力が豊かなのである。

ではこの本の結末はどうか。ナンセンス絵本が大切にしている余韻を残すような終わり方なのか、見てみることにしよう。最後のページを取りあげると、次のようになっている。

ブタヤマさんは もう なにも いいません。

キャベツくんが「むこうに美味しいレストランが あるから なにか  
ごちそうしてあげるよ」といいました。

ブタヤマさんは よだれが かぜにのって やわらかく  
ながれていきました。

ただお話の中で、動物がキャベツを食べたら、キャベツと合体した生き物になるという設定だけではなく、最初からお腹がすいているブタヤマさんだから、最後にはぼくをたべるかわりに、レストランでおいしいものをご馳走してブタヤマさんが満足できるようにしている。お話を聞いている子どもたちもほっとするのである。そうすると、5ページ目のブタヤマさんがキャベツを食べるところから最後から2ページまでは架空の世界のお話で、最後にまた現実に戻るように構成されていることも理解できる。ナンセンスの要素も含みながら、ファンタジーのような別世界を描いているようにも見えるが、いろいろな動物がキャベツを食べることには論理性がないので、やはりナンセンス絵本の性格が強いといえる。

長新太はナンセンス絵本の日本における代表として挙げられるが、まだまだ文学的な意味では完成の域ではないように思われる。それはエドワード・リアやホフマンが求めた高い文学性と比較すれば。ただ、長新太はもっと庶民的な娯楽のようなユーモアや笑いを演出した点では、日本のナンセンス絵本の草分け的な存在であることは事実である。

## (2) 佐々木マキの絵本

佐々木マキは、エドワード・リアの『ナンセンスの絵本』の詩に、自分の絵を書き添えた『たわごと師たち』(佐々木マキ 訳・画、福音館書店)がある。佐々木マキはエドワード・リアの類まれな詩と絵に惹かれていたことがよくわかる。彼自身もナンセンス絵本の領域で活躍した日本の絵本作家の一人である。

### ①『ぶたのたね』佐々木マキ、絵本館

この本の続刊に『またまた ぶたのたね』がある。この話は、間抜けなオオカミがブタの種を植えて、ブタの木が大きくなって、ブタがいっぱいになったら、それを食べようとするが、結局、どじなことをして食べられないという結末である。このブタの木という発想が面白いのだが、あまりにも非現実的で小学校高学年以上にはなかなかそのお話に入っていけないようなところもある。こういう超自然的な発想がナンセンス絵本として日本では捉えられているが、果た

してこういう超自然的な発想がナンセンス絵本として定義してよいのだろうか。佐々木マキの文章は普通の絵本とそんなに変わりがない。エドワード・リアの文章が韻を踏んだり、字数を制限したりしているなどの文学的な要素は少ない。ただ、ブタの種を植えてブタの実がなるという発想はまったく論理性がないし、ナンセンス的な要素が強いことは事実である。

②『ムッシュ・ムニエルをごしょうかいます』佐々木マキ、絵本館

このお話は、ムッシュ・ムニエルという手品師が弟子にするという子どもをさらうために魔法を使うのだが、それに失敗して、また元通りにしてしまうというものである。この話では、呪文で変な魚に姿を変えたピンが、空を飛んでいき、弟子にしようとしている少年だけでなく、少女もさらってくるのである。呪文を唱えるとピンは変化し、少年をさらう場面などはそんなに抵抗なく理解できる。この本の中で呪文を唱えて、ピンを魚に変えるというところや、また最後の魚からピンに戻すという場面以外は、何も超自然的なできごとはないし、ナンセンス絵本の分類に入れるべきか迷うような作品である。佐々木マキは、このような作品も数多い。ただ、ところどころ、文体が統一されていたり、繰り返しのリズムを用いたりしているところもある。このあたりは、やはりナンセンス絵本を意識しているのではないだろうか。

(3) 日本のナンセンス絵本の特徴

長新太や佐々木マキの作品に触れると、エドワード・リアのナンセンス絵本と違っていることが理解できる。ただ、日本では、長新太や佐々木マキなどの奇想天外な発想などを捉えてナンセンス絵本と結び付けているようなところがある。つまり、日本でナンセンス絵本と呼ばれているのは、絵本の中の登場人物や出来事などが奇想天外で、日常のあり得ない現象などを表現しているだけのものと思われる。だからエドワード・リアなどが描いたナンセンス絵本とは、全く違うものとして捉える方がよい。

これまでの日本のナンセンス絵本というものは、どちらかという奇想天外

で超自然的であるが、文学的な要素はあまりない。だから、日本のナンセンス絵本は「ユーモア絵本」としての性格が色濃いと考えてもよい。そういう目で見ると、日本ではユーモア絵本の作家は多数いることがわかる。

日本のナンセンス絵本をこのような視点で見えていくと、長新太や佐々木マキなどは、もっとも奇想天外で超自然的な内容を扱っていることも理解できる。こういう点では、単なる日本のユーモア作家と異なるところでもある。

## 6 ナンセンス絵本セラピーの実践

### (1) ナンセンス絵本を使った実践

ここでは長新太の『なにをたべたか わかる?』（絵本館）の絵本を用いて絵本セラピーの研修を実施した。そこでの参加者の感想を参考に述べていきたい。研修では次ページの下記のようなワークシートを用意し、各自が絵本を読んだ後で、ワークシートに記入してから、グループごとに話し合いをした。グループで話し合うことで、お互いの意見が深められて、内容が盛り上がっていくと考えたからである。

まずこの絵本のあらすじを述べておきたい。

ネコが大きな魚を釣った。それをネコが背中に抱えて運んでいる間に、それを見ているネズミ、うさぎ、いぬ、たぬき、きつね、ぶた、ゴリラなどを順番に魚が食べていく。その間にもネコが背中に抱えている魚はどんどん太っていく、しまいにはネコは重さに押しつぶされてしまう。そこでネコは魚に食べられるかもしれないのに、魚に近づき、今度はネコが魚を食べ始める。そして、ネコは魚をすっかりと食べてしまった。

最後は、このような文で終わっている。

ねこはさかなをぜんぶ  
たべてしまったんだけど、  
ねこがたべたのは  
さかなだけではないんだよ

なんとなんとなんと  
なんとなんとなんと  
なにを  
たべたかわかる？

次が研修に実施したワークシートです。

<絵本セラピー講座 NO.2>

『何をたべたか わかる?』（長新太、絵本館）を読んで、次のことについて考えてみましょう。

- ① 魚は次から次へと食べているのに、どうして猫を食べなかったのでしょうか。
- ② 猫が魚を食べ、最後に「なにを たべたかわかる?」と言っています。あなたは何を食べたと思いますか。
- ③ この絵本のテーマは何でしょうか。
- ④ 長新太はこの絵本でどのようなメッセージを発しているのでしょうか。

この絵本について、ワークシートの①～④について参加者から感想を聞いて、グループで話し合いを行った。その分析が以下のようなものである。（\*実際に現物の絵本を見ながら、次の感想を読むとわかりやすいと思われる。）

（2）絵本セラピー講座の感想

- ① 魚が次から次へと食べているのに、どうして猫を食べなかったのでしょうか。
  - ・魚は猫に食べられるもので、猫は魚を食べるものだから
  - ・他の動物を食べている間に、お腹が大きくなったから
  - ・担いでもらっているので、最後に食べようと思っていた

- 寝ている猫の夢だから。すべて猫の夢だから
- 猫を食べることに気が付かなかった（魚が猫につられたので）
- 猫につられた存在だから、「食」の対象にはならなかった
- 海から釣り上げてもらったから
- 魚は猫に食べられるものという力関係があるから
- 猫まで魚の口が届かなかったから
- 魚は猫につられた負い目があるから
- 魚からしたら猫が食べ物に見えないから

参加者から以上のような意見が出てきた。実に様々な捉え方があり、この絵本を読んだ時の多様な考え方に驚かされる。ここで考え方を大きく分けると次のようになる。現実の話として捉えるか、夢のような話として捉えるのかである。まず現実の話とした場合に、あまりにもありえない現象が起きている。魚の大きさについても、次々と動物を食べていくことについても違和感がある。

では、架空の話として捉えると、夢の話か、想像上のお話かという考え方ができる。一般的にナンセンス絵本は、ありえない超自然的な現象が多いことから想像上のお話と捉えるのが妥当と考えられる。

そう考えていくと、猫は魚を食べ、魚は猫に食べられるものという一般的な話ではなく、もっと自由な考え方ができるように思われる。猫と魚の力関係もそうかもしれない。

これは読者にも魚が猫を食べるだろうと予想させておいて、長新太がわざとその逆の展開に持っていったように考えてもよいのかもしれない。そこにナンセンス絵本としての特徴が出ている。魚がいろいろな動物を次から次へと食べていくことも実際にはありえないことだが、もしそういう魚がいたら大変なことになると読者にも思わせ、普通の魚の概念を覆す描き方をしているのに、最後には読者が思いもしない結末が待っている。これがナンセンス絵本の本質であり、そこに笑いとユーモアを織り交ぜて描かれてこそ、ファンタジー文学にならないような理詰めではない奇想天外なストーリーになっていることがわかる。



ナンセンス絵本の本質を十分に調べていくと、ストーリーの展開の意外性や逆転の発想なども理解できる。これは、やはりファンタジー文学が空想の登場人物や事象を扱う場合にその筋道の論理性を重んじるのに対して、ナンセンス絵本は全く論理的ではないにしろ、計算された意外性の面白さやユーモアというものが読者に笑いを届けていることがわかる。

② 猫が魚を食べ、最後の「なにを たべたかわかる？」と言っています。あなたは何を食べたと思いますか。

- 魚が食べたすべての動物の「ねずみ、ウサギ、・・・、ごりら」
- 夢の中味
- 魚
- 自分では気づかないいろいろな命をいただいている
- 猫は魚を食べたと思っている。しかし、魚はいろいろなものを食べているのに知らないだけ
- ひたすら生きていく道で、知らぬ間にいろいろなものをいただき、食べるものだけでなく、大きな試練も表しているのではないか
- 猫は一方向を歩いている。魚は次々に食べるものが大きくなる。だから今までのものをすべて食べたことを意味しているのかも

ここでもいろいろな意見が出てきた。これはやはり子どもたちに聞いても様々な考え方が出てきそうである。絵本の中でもこのようにオープンエンド的な結末の本は少ない。それだけに長新太はお話の奇想天外な意外性に加え、結末も読者に楽しんでもらうためにこのようにしたのであろう。

これには答えがないのである。それは読者が読んで自分自身の想像で考えるところに面白さがあり、一人一人違っていてもよいのである。ここの感想にあるように単なる魚と答える人もいるし、魚が食べたすべての動物と答える人もいるだろう。さらに現実の世界ではなく、猫自身が夢の中の世界で食べているという考えもできる。

グループで話し合うと様々な意見が出てくる。そしてその中で一人ひとりの作品の捉え方の違いを知ることも楽しみとなっていく。そういう他人の感性を感じながら進めていくことがセラピーに繋がっていくのである。

③ この絵本のテーマはなんでしょうか。

- ・知らないうちに知らないことがおきていて、危ない場面に出会っているのに常にくぐり抜けているという幸運
- ・油断すると、自分の身にもふりかかる
- ・次々にいろいろなものを食べていくという意外性とわくわく感
- ・ひたすら歩いているが、当たり前のように片付いていることもあり、なんとかなるということ
- ・猫が人間だとしたら、食物連鎖の頂点に人間がいる
- ・意外性の面白さ。「ありえない」と言いながら聞ける楽しさ

これはナンセンス絵本というものが理解できていれば、この作品は案外理解しやすい。最後の方の意見のように、この絵本は意外性の面白さであるといっ  
てよい。まず魚が動物を食べるということは、一般的な考え方であれば逆であるからパロディとなっている。そのあり得ないことを繰り返しながら、最後に食べたものが、また食べられるという意外な結末を迎える。そこにナンセンス絵本独特の要素を含んでいる。読者が予想もしえない展開が読者を驚かせ、その意外性が笑いを誘うのである。しかも、最後には長新太自身が余韻を残すために読者にも考えさせるような余地を残している。ナンセンス絵本としては、かなり質の高い作品であると評価できる。

④ 長新太はこの絵本でどのようなメッセージを発しているのでしょうか。

- ・命はつながっているということ
- ・生きるためにいろいろな命をいただいているということ
- ・次は何が起きるかわからないということ

- ・この世には信じられないことが起こるかもしれない
- ・食物連鎖が揺らぐ可能性
- ・自分たちを食べるものが出てくるかもしれない
- ・自分が食べるものにはたくさんの命がまっている
- ・魚が運ばれる間にたくさんの命をいただいている。猫は全くそのことに気付いていない。いつでもこの逆もあり得る
- ・命はつながっている
- ・生きるためにいろいろな命をいただいている

この絵本のメッセージの捉え方は上記のようにいろいろな考え方があることがわかる。作品の捉え方がそれだけいろいろなものがあるということは、読むときの鑑賞の幅があるということであり、作品の質の高さを象徴している。

長新太は「いのち」というテーマで、食物連鎖のパロディを演出しながら、最後にはお話の「落ち」もつけている。あり得ないような意外性を締めくくる形として、猫が魚を食べるように持ってきている。これにはいろいろな意味も含まれているが、何でも思い上がって自分の思い通りにことを進めていると、大きな落とし穴があるかもしれないということまで示唆されるていような気がする。

本来ナンセンス絵本は、ここまで考えて描かれていないかもしれないが、読者の読み取りの幅が広く、どんな感想が出てくるかわからないような絵本こそ絵本セラピーに向いていると言えるのではないだろうか。

ナンセンス絵本を読み解いていくことで、自分の考え方の視野を広げたり、他人の考え方を理解したり、自分に取り入れられるような考え方に会ったりすることで、絵本セラピーの本来の目的が達成されていくように考える。理屈なく楽しく、面白い要素を持つナンセンス絵本は、生活の中でも笑いや楽しみを届けてくれる大きな要素を持っている。その笑いや楽しみは人々の心の緊張を解きほぐし、精神的な安らぎを届けてくれるのである。これこそが絵本セラピーが目指すものの一つでもある。本研究で扱ったナンセンス絵本が絵本セラ

ピーとしての効果が期待できることは間違いないと確信している。

## おわりに

本研究では、ナンセンス絵本とそのセラピー効果について述べてきた。日本では、ナンセンス絵本についての専門書がほとんどないのが現状である。そこで、イギリスのエドワード・リアやドイツのハインリヒ・ホフマンの絵本だけでなく、彼らの解説書等から、ナンセンス絵本とは何か、どのような特徴を持っているかなどの分析を試みた。本文でも述べているように、ナンセンス絵本はナンセンス文学にも大きな影響を与えていることがわかる。

ここではナンセンス絵本のみにも焦点を当てたために、エドワード・リアの『黄金の川の王さま』（青土社）、『ヴィクトリア朝妖精物語』（筑摩書房）などに収められている『ナンセンスの絵本』とはちがった少し長い詩集などは紹介できなかった。さらに『みみずくとミミー』（ほるぷ出版)のようにロマンチックな詩も見られる。エドワードはナンセンス絵本だけでなく、幅広い分野での詩集が見られることがわかる。

またナンセンス文学（絵本）はファンタジー文学と並ぶ代表的な文学形式であることもわかる。このようなエドワードやホフマンの著作から、ナンセンス絵本の概要や特徴が明らかになってきた。このような視点から、日本におけるナンセンス絵本を見ていくと、その違いや特徴も明らかになってくる。

日本のナンセンス絵本は、エドワードやホフマンなどのナンセンス絵本とは異なり、日本独自のスタイルができつつあることも理解できる。いわゆる日本におけるナンセンス絵本の分野が少しずつ固まりつつあるのではないだろうか。しかし、ナンセンス絵本とユーモア絵本との違いや境界のようなところは、まだまだこれからの課題である。

このナンセンス絵本を活用した絵本セラピーは、子どもだけでなく大人に対しても、笑いとユーモアなどが癒しにつながっている。ファンタジー文学のような論理性はないにしろ、ナンセンス絵本の奇想天外な発想や出来事は、無意識の内に読者の心を開き、楽しめる世界へと導いてくれる。このことこそがナ

ンセンス絵本のセラピーではないかと思われる。今後、ますますこのような分野での研究が深まっていくことを期待したい。

#### 参考・引用文献

- 1) 『リアの ナンセンスの絵本』エドワード・リア さく、やなせ なおき やく、ほるぷ出版（ほるぷクラシック絵本）
- 2) 『ナンセンスの絵本』E・リア、柳瀬尚紀訳、筑摩書房
- 3) 『ナンセンスの絵本』エドワード・リア作、柳瀬尚紀訳、岩波書店
- 4) 『不思議の国のアリス』ルイス・キャロル作、協明子訳、岩波書店
- 5) 『鏡の国のアリス』ルイス・キャロル作、協明子訳、岩波書店
- 6) 『EDWARD LEA'S NONSENSE OMNIBUS』（邦題：りあさんて、どんな人？）エドワード・リア著、みすず書房
- 7) 『ノンセンス・ソング』エドワード・リア著、新倉俊一訳、思潮社
- 8) 『黄金の川の王さま』ジョン・ラスキン著、富山太佳夫・富山芳子編
- 9) 『ヴィクトリア朝妖精物語』風間賢二編、筑摩書房
- 10) 『もじゃもじゃペーター』ハインリヒ・ホフマン さく、ささき たづこ やく、ほるぷ出版（ほるぷクラシック絵本）
- 11) 『だいすきな おはなし』トミー・デ・パオラ、坂崎麻子訳、リポポート
- 12) 『たわごと師たち』エドワード・リア 詩、佐々木マキ 訳・画、福音館書店
- 13) 『カングル・ワングルのぼうし』エドワード・リア ぶん、ヘレン・オクセンバリー え、にいくら としかず やく、ほるぷ出版
- 14) 『子どもの本の歴史』ピーター・ハント編、柏書房
- 15) 『なにを たべたかわかる？』長新太作、絵本館
- 16) 『みみずく と ねこのミミー』エドワード・リア文、バーバラ・クーニー画、絵本館